

青少年らしき

家庭版

発行
倉敷市教育委員会
編集
生涯学習課
☎ 426-3845

3月



自然と人の間で育つ子どもたち 豊かな地域の教育力で育まれて

今回は、倉敷市立庄小学校 千葉照久 校長からお話を伺いました。校長先生は、三月末で定年退職を迎えられます。また、本年度は倉敷市小学校長会の会長も務められ、多忙な一年を過ごされました。校長先生は、社会教育に精通されており、長年、学校と地域社会の絆づくりに多大な貢献をなされました。

教員生活の中で十四年間、学校を離れて社会教育担当者として学校外活動に携わることができました。その経験から、学校外での子どもたちの学びの様子や子どもの成長にとって大切ななど感じたことを紹介します。

まず、週末の自然体験クラブでのエピソードです。ちょうど完全学校週五日制が導入されようとしていた頃、週末の子どもたちの活動を支援するクラブが公民館などを中心に各地に設立されました。私がお世話になったクラブでは、地域の各分野の愛好家の皆様のご協力のもと、カヌー体験や手作り

いかだ遊び、手作りソリ体験など、子どもたちが喜びそうなプログラムを準備しました。

応募してきた子どもたちは、最初は物珍しさもあつて楽しそうにそれぞれの活動をするのですが、そのうちに飽きてしまつて、川に入つて魚採りをし、せっかく作つたソリを放り出して雪合戦に興じるなど、思い思いに遊び始めてしまいました。かなり手間暇かけて準備をしていたので、大人たちは少し残念な気持ちになりましたが、体全体で自然と触れ合っている子どもたちの姿を見守っているうちに、子どもたちはこんなにも自分たちで遊びを創り出していく力をもっているんだなあ。子ども

もの独創性はすごいなあ。」と感心させられるようになりました。自然の中で仲間と共に楽しみながら遊びを創造することで、自主性・独創性・協調性が育つとともに豊かな感受性も育つように思います。この経験から私たち大人は、子どもの安全・安心を確保した上で、ゆつたりと流れる時間の中で、子どもたちが、思う存分自然と触れ合う機会を保障することの大切さを学びました。

次に、四泊五日の長期宿泊体験学習でのエピソードです。

今から二十年程前、ある町の三校の小学六年生全員を対象に、学校教育と社会教育が連携したモデル事業を実施しました。具体的には、洪川青年の家を舞台に、その地域の様々な教育資源を活用しながら、「環境」をテーマとした総合的な学習を行うものでした。

担任の先生方は、子どもたちと共に学びのテーマを設定し、学びの計画をつくりました。そして、社会教育担当者は、その学びを実現するために、各種機関や団体に協力を依頼し、見学や体験のお願いをしたり、交通手段を確保したり、ゲストティーチャーやボラン

ティアのお願いをしたりしました。数か月に及ぶ準備の後、いよいよ学習の始まりです。

子どもたちは、「瀬戸内海の水質」「海の生物」「産業廃棄物問題」など、それぞれのグループのテーマにそつて追究活動を進めました。この学びのために、海上保安庁・水産試験場・漁業協同組合・海洋博物館・高等教育機関など、多くの方々のご支援をいただきました。実際には、次のような追究活動が展開されました。

産業廃棄物問題を追究するグループは、海上保安庁の協力を得て巡視艇に乗せていただき、豊島の産業廃棄物の現状を海上から見学したり、実際に島の方々にお話を伺つたりしながら追究しました。

また、海の生き物を追究するグルー



プは、海洋博物館の協力を得て、餌や



倉敷市立庄小学校

5年 吉井 真比呂 (令和元年度) 木エパズル

「ニセコエクスプレス」

ぼくは、野球が大好きなので、「北海道日本ハムファイターズ本車両」の特急列車をパズルにしました。

究意欲がここまで高まり、

りなどバックヤードの仕事を体験させていたが、生物の生態について多くのことを知ることができました。とりわけ、ウミガメプールの清掃では、ウミガメの甲羅をタワシでこするなど、日頃体験できない活動も行うことができました。笑顔の子どもたちを見ながら、きつと小学校生活の良い思い出になったろうなと思いました。

どのグループも、五日間の追究活動を楽しみながら熱心に行い、最終日にはポスターセッションで生き生きと堂々と発表し、交流し合うことができました。

持続するの

かと驚かされました。同時に、書物やネットでの調べ学習だけでなく、現地で本物を見たり触れたりしながら、それぞれの課題に関連する各分野のプロの方々のお話を伺うことで、より一層充実した追究活動とすることができました。まさに、バーチャルではなく、リアルを持つ底力を感じさせられました。

また、こうした学びの姿以外でも、五日間を家族と離れて、子どもたちだけで生活することで思わぬ成長も見られました。

五日間の渋川青年の家での集団生活

では、食事以外の全てを自分たちで行わなければなりません。清掃や布団の片付けは当然ですが、日々の洗濯も自分たちで行いました。最初は上手く出来なかった子どもたちも、中盤ともなると下着や体操服をてきぱきと洗って干すなど、要領よくこなすことができるようになりました。

さらに、テレビやゲームもなく常に集団で暮らすことから、なかなか家が家のようにはいきません。そのため、二日間くらい



では様々なストレスから、友たち同士の衝突も多く見られました。しかし不思議なこと、時間の経過とともに穏やかな雰囲気の中で過ごすことができるようになってきました。きつと、お互いの良いところを認め合って、自分のわがままを少しずつ我慢し合って、上手に仲間と暮らすことができるようになったのだなあと思いましたし、もつと長くいたいと言う子の多いことに驚かされました。

この事業の後のアンケートでは、子どもたちがすごくしつかりと力強くなったように感じる。「という回答を八割の保護者からいただきました。

以上ご紹介したように、学校外での子どもたちの様子と成長に触れることで、地域の自然や地域の方々のもつ教育力の豊かさを強く感じさせられました。それは、学校教育のように意図的・計画的なものではなく、無意図的に偶発的なものです。自然に触れ、様々な方々に触れ、その子なりに何か感じ取ること、一歩成長させることができる地域の教育力は、子どもの人間形成の基盤になくはならないものだと思います。効率化や拙速な成果を求め

られる現在ですが、じつくりと時間をかけて自然に向き合ったり、地域行事に出かけて多くの地域の方々と交流することで、本物を体験したり多様な価値観に触れたり、子どもたちは学校や家では得られない多くのことを学んでいくでしょう。そして同時に、いろいろなお話を聞く中で、自分の将来をイメージし、夢を描いてくれるとありがたいなと思います。そうした自分のライフイメージを持つことが、学習や様々な活動への意欲の源になるのではないかと思います。

大人も子どもも何かと忙しい日々ですが、家族や先生以外の、様々な大人とゆつくりと話ができる機会を大切にしてみたいかがでしょうか。

これから先、自分自身も、地域の教育力の一助となるよう、さらに子どもたちとの触れ合いを楽しんでいきたいと思っています。(おわり)

